

潁原退藏著作集

第一卷

額原退藏著作集 第一卷

定価 二八〇〇円

昭和五十五年五月一日印刷
昭和五十五年五月十日発行

著 者 額 原 退 藏

発行者 高 梨 茂

印刷者 山 田 博

発行所

中央公論社

東京都中央区京橋二一八―七
電話(五六―)五九二―九

振替東京二―三四

©一九八〇 検印廃止

刊行のことば

頤原退蔵博士逝去せられてより早くも三十年、ここにその著書ならびに各種講座・新聞・雑誌等に執筆せられた論文・随筆、さては大学における講義ノートの類に至るまで捃摭編集し、改めて『頤原退蔵著作集』全二十巻・別巻一卷として世に贈る。

その意図するところは、我が国近世文学の研究に寄与貢献せられた先生の業績を追慕顕彰し、以て後来の若き研究者の輩出と学問の新しき発展を庶幾するにあり、また一つにはこれによつて、先生の学恩に對する報謝の志を表するにある。

改めていふまでもなく、先生は明治・大正期における斯学の大先達紫影藤井乙男博士に師事し、その後を承けて京都大学の講壇に立つ傍、招かれて各地の大学にも出講せられ、同時に多くの著書・論文を發表して斯学の向上発展に大いなる貢獻をせられた。昭和初年に始まる近世文学研究、とりわけ俳諧史研究の興隆は、専ら先生に負ふものといふも決して過言ではあるまい。

さればこの度の「著作集」編集についても、同門の友人・受業の門人、また大学の講筵には侍せざるも先生の門を敲いて親炙提撕を受けた人々を代表して、我等三名編集の任に当ることにしたが、同門の友人は別として、大学の内外において先生の教へを受け現在学界において活躍しつつある多くの諸君に

委嘱して、それぞれ専門とする部門に従つて各巻の編集を担当してもらふことにした。

しかし頼原退蔵先生は、決して我等だけの先生ではない。生前は勿論現在まで、そして将来にわたつて、近世文学の研究に志すすべての人々にとつての偉大なる先生である。

この度の「著作集」刊行を通じて、まだ見ぬ多くの方々と、同門に遊ぶ喜びを共にしたいと思ふ。

昭和五十四年一月

頼原退蔵著作集編集委員会

岡田利兵衛

野間光辰

尾形 仿

目次

江戸時代の文芸に現はれた人間観

近世末期文芸の世界観

近世後期文芸の特性

西鶴の小説と芭蕉の俳諧との文芸的意義

余情の文学

余情の美学

追憶と余情

表現の二重性

俳諧の笑

九

三

四

三

五

六

一〇〇

一〇三

一二

江戸時代の諷刺文芸

二七

戯作の精神——近代意識の一発露として

二六

近世文芸と万葉集

二三

忠臣蔵と江戸文芸

一九

近世の文芸に描かれた長崎

一八

俳諧と茶

二四

古俳諧と炭

三〇

江戸文芸史

三五

一 概説 二 仮名草紙

三 浮世草子

四 芭蕉の俳諧

五 井原西鶴とその作品

六 八文字屋本

七 洒落本と黄表紙

日本文学書目解説——上方・江戸時代

三二

はしがき 凡例 小説 浄瑠璃 歌謡 狂歌・狂文

俳諧・雑俳

日本文学書目解説 項目・書名索引

五〇一

後記

五〇六

近世文学

江戸時代の文芸に現はれた人間観

一

江戸時代の人々が人間をいかなる存在として考へて居たか。今当時の文芸作品を通してこれを見ようとするのである。勿論我々は江戸文芸の中から、直にこの人間学の根本的な問題に対する哲学的な自覚などを見出す事は出来ない。由來我が国の文芸には作者の思想的な裏づけが乏しいと評されて居るのだ。さうした批難が單に西欧人、若しくは西欧風な文芸批判の偏見に基づく場合も確かに多い。例へばオーロ、ウイリアムス氏が数年前雑誌“*Criterion*”に寄せた『源氏物語』に関する評論の如き、西欧人の源氏物語論としては恐らく最も力の籠つたものと思はれるが、そして『源氏』の文藝的価値も十分に認めて居るのだが、しかも結局紫式部が恋愛と感傷と社交との外に何の問題も取扱つて居ない事に不満を表明して居る。それは即ち『源氏物語』の中に道德的乃至宗教的な理念が描かれてないといふのだ。けれどもかうした不満は、例へば岡崎義恵氏の「源氏物語の研究」（改造社版日本文学講座第三卷所収）の如き光源氏の道心を中心とした源氏物語観が、より深い理解の中からなされる事を思へば、決して正しい考察でない事は明らかであらう。とはいへ眼を転じて江戸時代の文芸に對する時、かなり同情ある批評者でも、その思想的

背景の貧困を指摘するかもしれないのである。

江戸時代の文芸について、哲学的若しくは宗教的なやゝ深い自覚や反省のあとを探らうとする事は、實際困難な事にちがひない。江戸文芸の作家たちは、所謂戯作者の名に甘んじて、あへて倫理道德の高い理想や深い思索から、自己の作品を出発させようなどとはしなかつた。又中世文芸に於ける浄土思想や厭世觀の如き宗教的な立場も、江戸文芸の中にこれを認める事は出来ないものである。けれども江戸文芸が当時新しく興つた民衆文化を最も適確に反映して居るものだとするれば、その民衆文化の間に新しく醗酵された宗教觀、道德觀、社会觀、人生觀、さうして人間觀もまたおのづからこゝに如実な姿を示して居るべき筈である。仮令それが深い反省を伴つて居ないにせよ、一般民衆の人間觀は学者や思想家等の個人的な論說に於いてよりも、むしろ浮世草子や川柳等でこそ一層正しく認められるであらう。加之西鶴の如き現実に對して極めて透徹した觀照を持つて居た作家にあつては、その片言隻句の中に最も鋭く人間性が捉へられて居るかも知れぬ。だから人間学的な体系の下に、江戸文芸に於ける人間觀をとり出して組織づける事は非常に困難であらうが、單に人間がいかに存在し、いかに生くべきものであるかといふ事に対する断片的な觀察は、実に豊富に拾ひ上げる事が出来る。この小論に述べようとする所も、またさうした意味に於いてに外ならない。

二

人間を善と惡、神と獸、天国と地獄の中間的存在であると見る事は、恐らくいつの時、いつれの所にも通じた考へ方であらう。さうして人間がこのやうな中間的存在である事から、あらゆる人間苦が生れ

て来る。人間の世界はだから畢竟苦の世界に外ならぬとも観ぜられる。實際人間が人間として特異の存在を保つ所以は、すべての人類が人間苦を負はねばならぬところにあると言つても宜い。しかしこの苦しみは人により、時により、所によつて、その受取方は必ずしも同一ではない。そこで人間苦が人類に共通したものでありながら、これに処すべき態度は千差万別となり、随つて所謂人間観もまた個人的に民族的に又歴史的に、種々の相違が見られるのである。

我が国の文芸に於ける仏教思想の浸潤は実に久しいものであつた。王朝以後の文芸に現はれた人間観といへば、何といつてもこの仏教思想の支配を受けないものは有り得なかつた。こゝに人間苦は専ら無常變易の世相の中に説かれ、浄土の欣求に光明を求めようとして居る。しかし人間は固より現実を離れて生きる事は出来ない。或は穢土を厭離し、或は空を觀ずると言つても、人間が人間としてあるかぎりそれは現実そのものの否定でなく、現実に於ける一の生き方を示すものでなければならぬ。即ち現実の中にあつて現実への執着を出来るだけ絶つ事である。かくして人間苦は始めて克服され、人間の生活はこの克服への道を辿る事に於いて存在の意義をもつ。随つて現世的な幸福や快樂は、人間生活にとつて第二義的以下のものでしかない。我が中世の文芸に於ける人間観は、少くともこのやうな考へ方の方向の中に見出されねばならないであらう。然るに江戸時代に入つて、その考へ方はいかに継承され、又いかに變化するに至つたか。

江戸幕府は治世の道を諡ふ為に儒者を登用した。儒教の伝来は言ふまでもなく奈良朝の昔にあつたが、それは從來専ら知識的な教養としてのみ学ばれ、随つて一般民衆の實際生活と深く関する所は少かつたのである。平安朝中期以後神仏の習合説が甚だ盛んであつたのに比して、儒教に対するさうした思想運

動が全く見られなかつたのも、要するに儒教の国民の實際生活に与る所が極めて少いからであつた。然るに江戸幕府の儒者登用から宋学勃興の機運が至ると共に、やがてその思想は支配者たる武士階級のみならず、民衆の間にも汎く及ぶやうになつた。近世文学史の初めに現はれる仮名草子の中にも、儒教の思想を通俗的に説いたものが頗る多いのである。かうして儒教の思想が一般に普及されるに及び、仏徒の間からこれに対応すべき運動が起る事もまた当然であつた。即ち当時儒者と僧侶との間には互に排他的の言論が行はれ、また仮名草子の中にも屢々儒仏の優劣は論ぜられた。例へばかの林羅山の間に頌祐老が答へた所であるといふ『儒仏問答』の如きはその一で、こゝにはすべて仏家に有利な論のみを引いて、儒家の説を破らうとして居る。しかし儒者にはすでに政治的権力の背景があつた。加之仏の非現実的思想に対する儒からの批難は、当時の民衆たちの常識には最もうけ容れられ易かつたにちがひない。こゝに江戸時代の新興階級たる町人の現実主義と、儒教の処世道德との契合すべき点があつたのである。中世的な仏教思想に基づく人間観は、今や民衆文芸の上にその影を潜むべき時が至つた。だが世の中はさう簡単には動かない。

理論的にも實際的にも、儒教の勢力はすでに優位にあり得たであらう。けれども千数百年の間深く滲み込んだ仏教思想の支配は、固より一朝一夕で脱れられるものではない。理論だけでは、又現実主義との共鳴だけでは、十分安んぜられないものが人々の心にはあつた。儒教を、若しくは仏教を、互に調和的に説かうとする立場が、江戸初期の特異な思想的傾向となつて現はれたのはこの為である。ことに通俗教化を主とするものにあつて、その傾向は著しく見られた。即ち当時の通俗教化の具たる仮名草子に、所謂三教一致を説いたものがいかに多いかによつてそれは知られよう。三教一致とは神儒仏、若しくは

儒仏老の教理の一致を説く事で、儒釈老三教の調和説は夙く漢土に起り、我が国でも弘法大師の『三教指帰』の如き論がすでにあつた。尤も『三教指帰』は一致論といふよりは、道儒二教を抑へて仏教の理義の深い事を示さうとしたものであるが、とにかく神儒仏老等の關係を説く事から、やがてその間に調和的思想の胚胎を見る事は既に久しかつたので、所謂三教一致論は決して江戸時代に始まつたのではない。しかし江戸時代に於ける三教一致は、名は三教であるけれども、実は専ら儒と仏との調和を説くのが主であつたので、こゝに時代的な特異性が見られねばならなかつた。即ちこれまで宗教的には勿論、その他すべての方面で人間としての存在を律して居た仏教思想が、今儒教的な解釈を得て新たに民衆の実生活に臨むべき適應性を得たのである。而してそれが理論としてよりも、新興民衆の實際的な現実主義に迎へられた事を、我々は見遁してはならないだらう。

江戸時代が文化史的に最も注目さるべき点は、町人階級が文化の發生展開に与つて大きな力をもつに至つた事である。それは言ふまでもなく彼等の經濟力によるものであつた。即ち彼等の蓄積した富が、眼ざましい勢で新しい文化を形作り、資本主義的に進んだ經濟機構が遂に武士の生活までを左右するに至つた。この時彼等は現實に於ける金錢の威力を、何としても痛切に感ぜざるを得なかつたのである。物質的な富が假令仮現的なものにすぎないと説かれたにせよ、それは目前彼等にとつて何よりも大きな魅力をもち、又實際に人間を、社会を何よりも強く動かすものであつた。偶々來世的な仏教に代つて現世的な儒教が勢力を得た事は、新しく興つた民衆たちの生活原理として、富によつて現實の快樂と幸福とを求める事を肯定せしめるのに都合がよかつたのである。勿論儒教は義理を尊び名分を重んじ、武士の生活の意義は特にこの点で規定されねばならなかつた。而して町人の生活もまたこの武士的道義觀の

支配から固より免れる事は出来なかつた。しかし武士と町人との階級的な區別が、すでに封建制度の中で運命的に固定したものとなつて居る場合、各自の階級の範圍に於いておのづから別箇の道義觀も認められねばならない。町人の間に「名を取るより得を取る」の語を正当化すべき風が動いて来るのは当然で、畢竟町人にとつては義理も名分も実利に従属する意味で重んぜられたにすぎない。江戸時代の新しい文化が町人の經濟力によつて形作られ、人々は實質的に金錢の威力で左右される世の中を知つた。さうして町人たちの間には実利第一の人生觀が必然的に植ゑつけられたのである。江戸時代の民衆文芸はつまりこのやうな人生觀及至人間觀を、そのまゝ反映し表現したものに外ならなかつた。

三

江戸時代の文芸はまづ仮名草子・古浄瑠璃・貞門談林の俳諧等から始まる。中世文芸に於ける人間觀がいかに近世的に繼承され、また近世的な變化を示すに至つたかを子細に吟味する為には、勿論これらの文芸に互つて一々考察せねばならないであらう。けれども限られた説述に於いて簡明を主とするならば、真に江戸民衆の文化をそのまゝに表現したといふべき浮世草子から、直に考察を始めた方がむしろ適切である。就中その代表的なものは西鶴の小説である。即ち西鶴に現はれた人間觀を説くことによつて、所期の目的はほゞ達せられるであらう。

町人の世に処すべき道は第一に成功致富を目ざす事であつた。それはすでに室町末期の頃から町人の家訓類に説かれてあり、寛永初年に出版された『長者教』の如きは特にその代表的なものであつた。西鶴の『日本永代蔵』は一名を『大福新長者教』ともいひ、即ちそれらの家訓類の系統を延いて、元禄の